

博物館だより

No. 9

企画展

「陶器の源流—須恵器—」

平成2年7月21日(土)

～8月31日(金)



台付子持裝飾壺 (愛知県陶磁資料館蔵) 高42.5cm



陶器の源流である須恵器。東海地方出土の初期須恵器と裝飾須恵器を中心に、その造形美に迫るとともに、古墳時代(5世紀～7世紀)の須恵器の変遷を概観します。

伝法寺地区で範囲確認調査

博物館では、平成元年12月12日から平成2年3月23日まで、一宮市丹陽町伝法寺地内で重要遺跡範囲確認調査事業を実施しました。

伝法寺地区は、名神高速道路と国道22号線が交差する一宮インターチェンジ南東に位置します。

明治22年から同39年までは二川村伝法寺と称した様に、五条川と同川支流である青木川に挟まれた地域で、両河川の形成した自然堤防帯（畑面）と後背湿地（水田面）からなり、高位である畑面と低位の水田面が複雑に入り組んで、島畑と呼ばれる独自の景観を呈しています。

今回の調査は、当該地区に2m×2mのグリッドと呼ばれる調査区90ヶ所を設定し、遺物包含層の範囲の確認とともに、畑面及び水田面における遺構の残存状況の把握に主眼を置いたものです。

(1) 伝法寺廃寺（小字塔塚地区）

小字塔塚の畑地、とくに中央部の用水の両岸から布目瓦が数多く出土していました。昭和49年には奈良時代の単弁蓮華文軒丸瓦が発見され、春日井市高蔵寺瓦窯で生産されたものであることが確認されています。こうしたことから、この一帯に奈良時代の寺院の跡があるのではないかと推測されていました。

今回の調査では、小字塔塚の中心部東西80m、南北100mの畑面に布目瓦の包含層が分布することを確認できました。また、小字塔塚の西端から小字新田裏にかけての畑面で、溝やピットなどを確認しましたが、これは、寺域を区画する溝、あるいは寺院周辺の集落跡の存在を推定させるものです。

(2) 元屋敷遺跡（小字元屋敷地区）

昭和36年に発掘調査が行われ、弥生時代前期と、古墳時代初頭の二つの時期の遺跡であることが確認されました。特に古墳時代初頭の遺物は、「元屋敷式」と呼称され、東海地方の土師器の編年の指標となっています。

調査の結果、東西120m、南北180mの畑面には非常に良好な状態で遺物包含層が埋蔵されていることが確認できました。ひとつのグリッドにおいては元屋敷期の遺物包含層下にさらに2層にわたる包含層を検出することができました。また、中世の生活跡が、埋蔵されている可能性も指摘できます。また、基盤である黄褐色シルト層に掘り込

まれた土壇あるいは溝が水田面にもある程度残存していることが確認できました。

(3) 西大門遺跡（小字西大門地区）

小字西大門とその西の小字柳ノ川の畑の土取りの際に多くの須恵器と灰釉陶器が出土していました。正式な発掘調査は実施されていないため、遺跡の状況はよく解りませんが、出土した遺物の質量から、この付近には奈良時代から平安時代にかけての集落跡の存在が推定されていました。

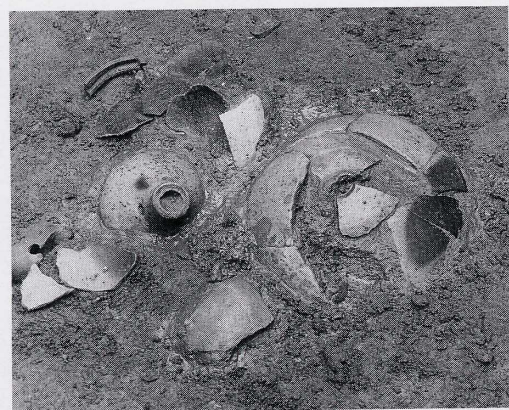
今次調査の結果、中央部の畑、西の水田面には、古代、中世の生活面が残存する可能性があります。またまったく予想しなかった小字飯守神の地域において、弥生時代の中期の遺物包含層が検出できました。

(4) 小字五輪ヶ淵地区

この地区では、五条川旧堤防に沿って奈良時代あるいは中世から近世にかけてのなんらかの遺構の存在が推定できます。

(5) 小字寺跡地区

小字寺跡地区は、天保12年(1841)村絵図に「正眼寺旧跡」とあり、嘉永6年(1853)伝法寺村見取場絵図には「正眼寺畑」と記載されています。今回は残念なことに明確な遺構あるいは遺物包含層は検出できませんでした。昭和40年に開通した現国道22号線下に埋没している可能性があるのかもしれませんが。（土本典生）



元屋敷遺跡土器出土状況

資料紹介 1

瀑布猿図 江戸時代後期 あさいせいしゅう 浅井星洲筆

絹本着色 102.6×40.7cm 一宮信用金庫寄贈

星洲は寛政8年(1796)中島郡荊安賀村(市内大和町)に生まれ、通称浅井勘兵衛、永正(正永とも)と号した。浅井家は、戦国期の荊安賀城主浅井田宮丸の末裔と伝えられ、江戸期に頭百姓と呼ばれた有力農民の家柄である。また、安政5年(1858)には悴政次郎へ苗字・帯刀を許されたものとして勘兵衛の名が見られる(『新編一宮市史』資料編十170号)。

幼い時から絵に親しんでいたが、京都に出て当時画壇の中心にあった四条派の門に入り、のち呉春の弟松村景文(安永8~天保14年、1779~1843)に従って画の技を磨いた。その後長崎など各地を歴遊して広くその画名を知られ、ついには尾張藩主に招かれ対面所の天井に龍を描いたといわれるが、その辺りの事は詳らかでない。後年居地にあつて文人達と交友、門人には小信中島(尾西市)の吉田稼雲らがいる。文久2年(1862)自宅にて没し、心証寺(現在市内大宮に移転)に葬られた。

ここに紹介する絵は彼の最も得意とした猿猴を描いたもので、その詩情豊かな写生描写には確かな筆使いが感じられる。猿図では森狙仙(延享4~文政4年、1747~1821)が著名だが、その作品群が星洲の創作意識の根底にあったことは十分に想像されるところである。星洲は御留筆おとのよでと称され、許可がなければみだりにひとの求めに応ずることが出来なかったといわれるが、その作品は大変数少なく、彼の出身地である一宮でも、当博物館に収蔵のこの一点が知られるのみである。(毛受英彦)

参考文献『尾西北のかがみ』・『愛知書家画家事典』など。



資料紹介 2 切刻煙草の包装紙

江南市の北端にある宮田町では、江戸時代から盛んに水車が使われてきました。明治5年の渡世願によれば、当時宮田村だけで水車業を営む家が16件あったようです。しかし、現在ではその痕跡として本田島の栗本信三さん宅の水路が、往時の姿をとどめるだけになってしまいました。

この水車ではいろいろなものを挽いたり、ついたりしたのですが、明治時代には煙草も刻んでいたようで、栗本政直さん宅にその包装紙が残っていました。この煙草は、「花車」というなかなか粋な名前で売られていたようです。たばこと塩の博物館の奥田館長さんにお聞きしたところ、明治20年ごろから水車を使った煙草刻みが始まり、30年代の石油発動機の開発で水車刻みが衰えていったということです。(田中禎子)



■平成2年度繊維講座始まる!!



博物館では、平成元年度から繊維講座(受講生20名)を始めました。これは、一宮地方における江戸時代中ごろから明治期にかけての、縞木綿の歴史に関する講義とその技術保存・伝承についての実技指導を、全20回にわたって行ったものです。また受講生の作品発表会として「手つむぎ・染め・織り展」を4月10日から15日まで開き、好評を得ました。テーブル・センター20点等を展示するとともに、随時糸車・手機の実演もしました。

2年度は、同様の趣旨で新たに17名を募集し、前年度生とともに30名でスタートしました。

- 2.2.11 第17回織維講座
- 2.2.24~3.25 企画展「木曾川とくらし」
- 2.2.25 第18回織維講座
- 2.3.4 講演会「尾張平野と天王祭り」
講師 名古屋民俗代表 伊藤 良吉氏
- 2.3.11 調査報告会「木曾川の渡し船」
報告者 当館事務局長 中山 雅麗
- 2.3.11 第19回織維講座
- 2.3.18 映画会「木曾川—その源流をさぐる—」
「木の文化」
- 2.3.25 第20回織維講座
- 2.4.10~4.15 「手つむぎ・染め・織り展」
- 2.4.28~5.27 特別展「地機で織る—越後縮—」
- 2.4.29 講演会「木綿以前の繊維について」
講師 名古屋大学教授 渡辺 誠氏
- 2.5.13 地機の技術伝承会
講師 愛知淑徳中学校教諭
小林 章男氏
- 2.5.13 平成2年度第1回織維講座
- 2.5.20 講演会「越後縮の古里」
講師 十日町市博物館 滝沢 秀一氏
- 2.5.27 第2回織維講座

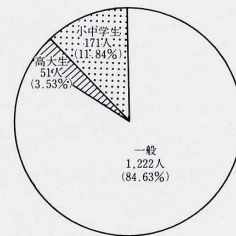
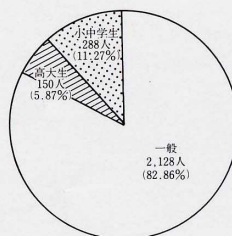
【ご来館ありがとうございました】

(2.2.1~2.5.31)

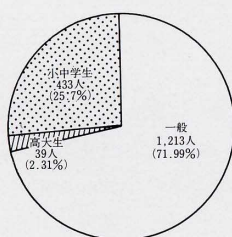
愛知県社会科教育研究会役員・高崎市歴史民俗資料館長・狛江市社会教育課・東海ブロック保健所長・一宮検察庁・仲好寮・若栗神社氏子一同・千秋小・末広2丁目子供会・愛知父母懇・大和東小3年生・一宮保健所・亀山市教育委員会・奥小教諭・唐津市議長・師勝町婦人消防隊・市内47中学校長研修会・羽島市歴史民俗資料館・吉良町文化財保護委員会・中部中学校特殊学級・蒲郡市博物館・一宮織維卸センター・一宮ロータリークラブ・瀬戸北ロータリークラブ・福知山市議会議員・微笑会・蟹江町歴史民俗資料館・京都閑話会・大和東小6年生・末広小3年生・浅野小4・5年生・萩原小4年生・丹陽小4年生・大和西小6年生・東浅井婦人会・神山小5年生・富士小6年生・宮西小5年生・岐阜ガス・於保子供会・会計検査員・豊田市秘書課・草加市職員・田原町社会教育課・磐田郡豊田町長ほか・西尾張4都市収入役ほか・一宮職業安定所長ほか・武豊町歴史民俗資料館友会の会・小嶋子供会・氏永子供会・祢宜町婦人会

展覧会開催中の入館者数

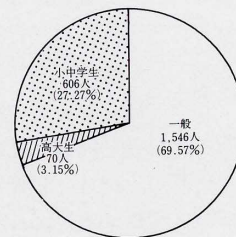
A. 特別展「一宮の名宝Ⅲ」 10/21~11/23 2,566人/28日
B. 企画展「尾張の戦国武将—兼松正吉—」 12/23~1/28 1,444人/25日



C. 企画展「木曾川とくらし」 2/24~3/25 1,685人/25日



D. 特別展「地機で織る—越後縮—」 4/28~5/27 2,222人/26日



これからの博物館

企画展「一宮の文化財」 9/14~10/7

開館以来これまで、一宮の名宝(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)と開催してきましたが、引き続き一宮の文化財展として、市指定文化財を中心に市内の文化財を展観するものです。

利 用 案 内

開館時間

午前9:30~午後5:00

(入館は午後4:30まで)

常設観覧料

区分	個人	20人以上の団体
一般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

(1人1回)

休館日

●毎週月曜日
(ただし、休日にあたる場合は翌日を休館)

●休日の翌日
(ただし、日曜日又は休日の場合は開館)

●年末・年始
(12月28日→1月4日)

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩5分

一宮市博物館だより 第9号

平成2年7月20日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216